

五味川純平

巨きな約束の土地

ソ連紀行

河出書房新社

ソ連紀行□ 巨きな約束の土地 □五味川純平著

¥ 290



昭和37年3月25日 印刷

昭和37年3月30日 発行

発行者 河出孝雄

印刷者 平井義一

東京都文京区大塚坂下町 200

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町3の8

TEL 東京 (291) 3721 振替東京 10802

印刷：暁印刷 製本：新宿加藤製本工場

☆落丁・乱丁のさいはお取換えいたします

© 1962.3

巨きな約束の土地・ソ連紀行□目次



こんにちは、お国の見物に□モジャイスキイ号で

ジャガ薯と少女□ナホトカの丘

シベリヤはばかでない□ハバロフスクまで

代表者・スチュアデス□イルクーツク上空

持てるだけ持って帰りたい□モスクワで夜

共産主義的人間像□大宅氏のみたワシリさん

盛りだくさんのプログラム□博物館攻め

全力投球のおしゃれ□モスクワ繁華街

軸の部分とその周囲□ベルリン・ホテル

忍び込んでくる退屈感□ポリシヨイ劇場

石だらけの書齋□「装甲列車」の作者

眠れる二巨人□レーニンとスターリン

農奴出身の詩人画家□キエフの街で

河でとれる魚なら何でも□ドニエプル河

すすくと伸びた戦後の子供□労働宮殿

軍楽隊を見たがった画家□農業博覧会の帰途

汚ない所だから撮ったのではない□鉄柵の門

英雄的抗戦の街□レニングラード

目録と手真似の鑑賞法□ネバ河畔の冬宮

教会と造幣廠と監獄と□ベトロパブロフスク要塞跡

外国文学の旺盛な消化力□レニングラード大学

驚くべき復元工事□プーシキン博物館

虫が歓迎するはずはない□一流ホテル

幅広い道路を埋め尽す機械□モスクワの路上

あなたはという人ですか□作家同盟書記室

全然心配要りません式演説□レセプション

そこぬけの親切□モスクワ最後の印象

泥くさい「シベリヤの灯」□イルクーツク

感無量□日本人墓地

二枚のハンカチ□バイカル湖畔

シベリヤの夜を飛ぶ□ハバロフスクへ

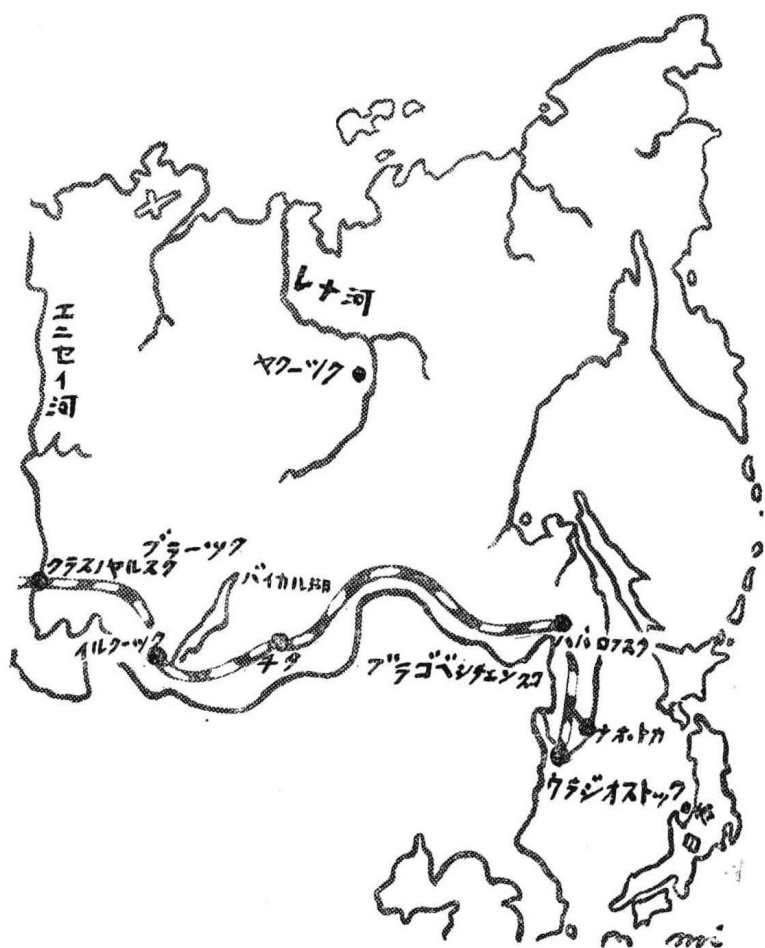
なんとなく圧迫感を□ナホトカまで

不協和音をもつ大シンフォニー□ソ連を去る

あとがき□

装幀□原弘

約束の土地



ソ連紀行

巨きな

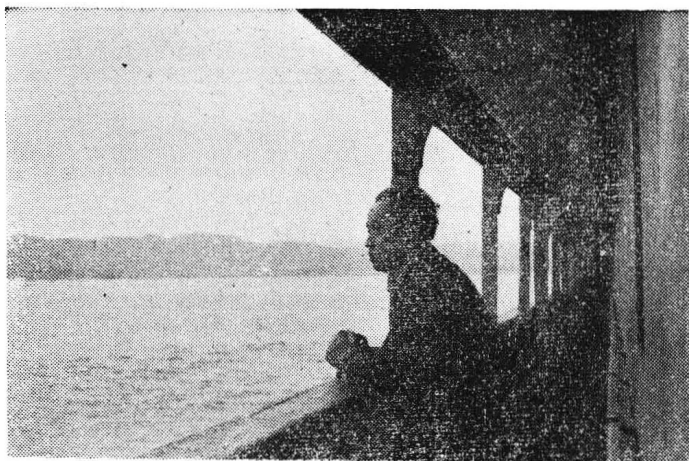


こんにちは、お国の見物に□モジャイスキイ号で

そこには兵隊がたくさんいるだろうか？　たくさんいて、十六年前のことを思い出させるだろうか？

東独ではやたらに立っていたと、行って来た知人から私は聞いていた。そのせいか、シベリヤの極東部にもいまだに兵隊がたくさんいそうな気がした。私はよほどどうかしていたにちがいない。既に十六年も経っているのである。関東軍は永久に消え去ったのだ。あのとき国境で銃火をまじえた私も、いまはただのツーリストである。

こんにちは。お国の見物にやって来ました。他意はありません。昔のことを思い出したくもありません。お世辞を言うつもりもありません。自費でやって来ました。一驚に値するものがあつたら、素直に驚くでしょう。顔をしかめなければならぬ場合には、遠慮なくしかめをする



巨きなロシア！ 値するものがあれば、私は素直に驚こう

でしょう。

モジャイスキイ号の小さな船室で、私は巨きなロシアに対する挨拶をひそかに用意した。

同室の船客は東京者ばかり四人。出版関係のKさんとTさん。それに、これから一か月間私たちをリードしてくれるYさん。隣りの部屋に地方から来た人たちがもう四人。反対隣りに老画家夫婦。この十人が一組である。

Kさんが私の十六年前のことを知って、

「それじゃ、感想も複雑なわけだね」

と言った。

私はバカみたいに薄笑いを洩らしたにちがいない。もしあのときシベリヤに送られて、何年か経ってナホトカから帰国したのだとしたら、どうだ

つたろう。いま、そのナホトカに私たちは着こうとしているのである。もしあるときシベリヤに送られて、多くの同胞がいまそうしているように、私も異国の丘で冷い眠りに入っているとしたら、どうなのだ。

「デッキに出ませんか」

Kさんがカメラを提げて、誰にともなく言った。

「波止場にたくさん人がいますよ」

兵隊は？

私はきかなかった。かつての勇敢で強壮だった上等兵は、もう白髪が生えている。百メートルも疾走したらぶっ倒れるだろう。先方にしたところで、私と殺し合ったかもしれない男たちにも十六年経っているのだ。もし波止場に兵隊がいるにしても、彼らはあるとき、三歳か四歳の、かわいい、食べてしまいたくなるような頬つべたをした子供だったはずである。そう、今後、ナホトカに限らない、行く先ぎ先ぎで、もし兵隊に出会って、その誰かが、もし、けわしい敵意の眼で私を見ることがあるとしたら、こう言いたくなるだろう。

「僕の白髪を見てくれ。四十五歳で多すぎると思わないかね。ある日の朝、僕たちは百五十八

人いた。そこへ君たちの兄さんやお父さんがやって来た。ちょうどいまの君たちと同じ恰好をしてね。三時間ほど経ったら、僕たちは四人になっていた。その四人も、いまでは三人だ。一人は、いま君が踏んでゐる土の下にいる。僕も入っていなければいけなかったかね」

§

波止場には兵隊の姿は見えなかった。多勢の少年少女たちが花束を持って歓迎陣を張っていた。これは、ハーフ・ギャラの使節団が幾組か同船していたから、そのために動員されたのだろう。

私は変な気持ちになった。あそこへ下りて行くのかね。使節団のお相伴で晴れがましい歓迎を受けなければならぬのかね。

なんとか早く素通りして、チーホ・オケヤンスカヤ駅まで行けないものだろうか。私はそうさせてもらいたさにYさんの姿を求めたが、Yさんは下船の段取りで忙しく動き廻っていた。下船がはじまった。四、五人ずつの小グループのハーフ・ギャラ組から下りて行って、さっそく花束を受け取ったり、バッジの交換をしたり、笑顔を撒き散らしたりしていた。親善風景

の皮切りは、どこでもこうしたものだろう。私のように仏頂面をして下りて行く者は、国際人の資格はなさそうである。

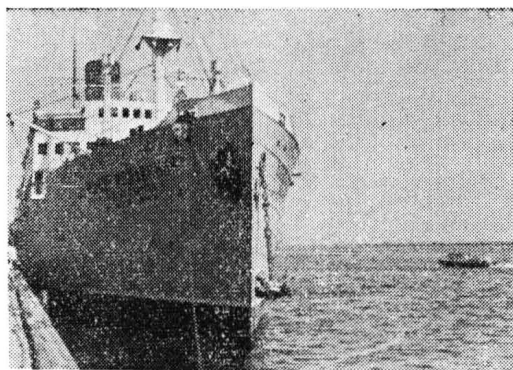
こんにちは、みなさん、御機嫌よう。

そのくらいことは、私にだって言えてもよさそうなものではないか。その程度のロシア語なら、日ソ協会からもらった「ソ連旅行必携」のおかげで、私も使えるはずなのである。

私は人々の群れの端っこにもっさりと佇んでいた。横浜を出てから四日目。ここはもう現在政治世界を実力的に二分しているソ同盟の東端部である。私たちがモスクワまでジェット機で飛ぶことになっているハバロフスクまで七五〇キロ、そこからモスクワまで六八五〇キロ。早くハバロフスク行きの汽車に乗りたい。そこまで十八時間四十分もガタゴトと揺られるのはうんざりするだろうが、波止場で歓迎を受ける面はゆさに耐えるよりは忍びやすそうである。

私はどんな顔をして立っていたのだろうか？ 一七五センチの身長と七五キログラムの体重を持った、酒は一滴もたしなまぬくせにいつも酒をのんだような赤い顔をしているこの男は、見知らぬ場所に放り出された小動物のようにおずおずしていたのだろうか。

ふと、私の前に、ほっそりとした少女が立った。十五、六歳にもなろうか。亜麻色の髪がち



モジヤイスキイ号——私たちをのせた船だ

ようど私の顎の高さにあった。この少女が何か呟きながら、私の背広の襟に鳩のバッジをつけてくれた。私の襟には何もついていなかったから、見かねてつけてくれたのかもしれない。私は何かをお返ししようにも、用意して来たみやげの品はトランクの中だし、バッジ類には日ごろ関心がなくて一つも持っていなかった。

「スパシーボ」

そうしか言えないとは、なんとも芸のない話である。

少女は、することをしたというような満足そうな笑みを浮かべていた。

そのバッジは、その後旅行の間じゅう、上衣を脱いだり着たりするときどきに手にひっかかったりするにもかかわらず、ずっと少女がつけてくれたままになっていたし、帰国してからもやはりそのままになっている。家の者がその服をクリーニングにでも出すときにははずさない限り、いつまでもそのままになっているだろう。そして私

はときどき意識するだろう、一九四五年と一九六一年のちがいを。

ジャガ妻と少女□ナホトカの丘

駅の入りは誰にでも自由にできるらしかった。改札口があるわけでもない。プラットホームに疎かな人影があつて、のそのそ歩き廻っている外国人旅行者を見ている。

発車までには時間があるし、時間を潰そうにもビュッフェは閉まっているし、私たち東京組の四人は、所在なくぶらぶらとプラットホームのはずれまで行つた。そこからは、この町を囲んでいる丘が見え、丘の中腹に建っているアパートらしい家並みが見えた。二年前に來たことのあるYさんの話では、当時はこんなに家が建つてはいなかったということであつた。たいていの屋上にテレビのアンテナが立っている。

ナホトカの丘に陽が沈む。暮色が黒ずみ、家並みの窓に灯がともる。私たちはなんとなくわびしくなる。もし偶然がちょっとした思いつきをこのときしなかったら、私たち四人はもそもそと指定された車輛に戻つて、空しく発車時刻を待つだけだったかもしれない。

ちょうどそこへ、貨物列車が入って来た。私たちの目の前の一輛に何人かの人が乗っていて、みんな野良仕事か何かの帰りらしかった。年とった女とかぼそい体つきの小娘が下りると、貨車の口から一人の青年が何かのいっぱい入った麻袋を五つ六つ二人の女に下ろしてやって、自分も身軽に跳び下りた。一見して、親子である。青年は小娘の兄にちがいない。三人ともひどく粗末な身なりをしていた。小娘はボロボロになった靴とも言えぬものをはいて、はだし同然であった。あら探しを目的とする旅行者が見たら、絶好の材料を発見したとほくそえみそうである。青年は二人をおいてどこかへ行ってしまった。貨物列車も動き出して、港の方へ宵闇の中に去って行った。

線路わきに放り出されている麻袋と二人の女を、私たちはプラットホームの端っこで見ている。小娘が麻袋の一つを動かそうとした拍子に、口を縛ってあったのがほどけて、ジャガ簣が転がり出た。小娘は私たちを意識してのことだろう、さもさもおかしそうに笑い声を立てた。母親は少しもおかしくないとでも言いたげに何か小声で言いながら、転がった芋を詰め直した。小娘はよく光る眼を私たちの方へチラチラと走らせながら、何かあったらまた吹き出しかねない様子で、麻袋の口を縛っていた。

どうやって持って行くつもりだろう？　これは、背広を着た四人の男がほとんど同時に考えたことらしい。

Yさんが母親の方へ何か言った。返事はさっぱりわからなかったが、「マシン」というのだけは聞き取れた。Yさんの顔を三人が見ると、

「さっき行ったのは息子なんですよ。自動車を持って来るんですって」

自動車をね。どんなポンコツでも、マシンはマシンだ。私は二人を見直した。母親は悠々としている。ナホトカ以外の場所で何がどうなるうとも、彼女はどの何袋かのジャガ薯を持って帰って、自分たちの生活を確実に掌握するだろう。小娘の方は薄汚れた顔から眼だけを光らせている。彼女は人生がはじまったばかりだし、それは退屈でもつまらなくもないと、母親や四人の旅行者よりもずっと激しく信じているのかもしれない。

「……自動車って、こっちへ来るんでしょう」

と、Kさんが、プラットホームの後ろ側を見た。

「ここまで上げとかなきゃならんわけだ」

Kさんは五十何歳かになるはずである。がっしりした体つきだが、糖尿病持ちで毎朝インシ